

本を読んでいたら、プロ野球の松井秀喜選手のことが出てきた。今日は、「校長室だより～燦燦～」の記念すべき500号が出る日である。「5」というと、松井秀喜選手のイメージがある。私が好きな数字の一つでもある。本の中の一部を紹介する。

私がヤンキースタジアムを訪れるのはヤンキースのゲームを観戦するためだが、お目当ては松井秀喜選手のプレーだ。

彼の放ったホームランが美しい弧を描きながら夜空を昇っていく光景はどんなにエキサイティングか、これは見た人にしかわからないだろう。拍手と歓声の中でゆっくりとダイヤモンドを一周する彼の姿がどんなにまぶしいか……。

2006年9月12日、この日、松井選手は彼の野球人生で初めて大きな怪我をし、長期の戦線離脱後の復帰戦に臨んだ。1回裏、彼がいつものように静かにバッターボックスにむかおうとした時、ヤンキースタジアムからどよめきが起こった。満員のスタジアムの観客が総立ちになり、彼を迎えたのだ。拍手は鳴りやまず松井選手は一度バッターボックスを出て、ヘルメットを脱いで声援に応えた。そこでまた球場全体がどよめき、松井選手にエールを送った。私はこのシーンを日本のテレビで見ていて、身体が震えた。ニューヨークのファンにこれだけ好かれていることが嬉しかったし、彼等の態度にアメリカ、メジャー野球の真の価値を見た気がした。

2002年11月、松井選手はFA宣言し、メジャーに挑戦することを発表した。日本のマスコミは大騒ぎになった。記者会見で彼は、“決断した以上、命を懸けて戦ってきます”と言った。野球に命を懸けるということがあるのか、今の若者に命を懸ける価値のあるものに出逢っている人が何人いるのだろうか、とその言葉は私自身の生き方をも、考えさせられた。

翌年2月、彼はヤンキースの一員としてキャンプ地を目指してニューヨークを訪れた。その日のニューヨークはひどい寒さで雪が舞っていた。彼はジョン・F・ケネディ空港から真っ直ぐ或る場所にむかった。

あの悲惨なテロの現場となったグラウンドゼロだった。吹雪が身体を打つ中で松井選手は、1時間余り、じっと立ちつくしていた、という。それを聞いた時、あの言葉は本心から出たものなのだろうと思った。それは対談の席で私が戦争と野球について質問したときのことだった。

「あなたは戦争についてどう思っていますか。戦争に対して何ができると思えますか」

「戦争を憎みます。でもボクがプレーができている限り、それが平和の証しだと信じています」

その言葉を聞いた時、この人は自分の職業と社会との関わりをきちんと考えたことがある数少ない若者の一人なのだと感心した。

一昔前なら、松井秀喜という日本人、今ならば大谷翔平という日本人をアメリカに送り出している。いずれも日本が誇る野球選手でありスポーツマンであり人物である。

松井秀喜選手の日米通算のホームラン数は507本である。この校長室だよりも、松井選手の本塁打数に近づいてきた。大谷翔平選手には、この記録を目指し、そして超えてほしい。「燦燦」もまた501号から地道にがんばろうと思う。